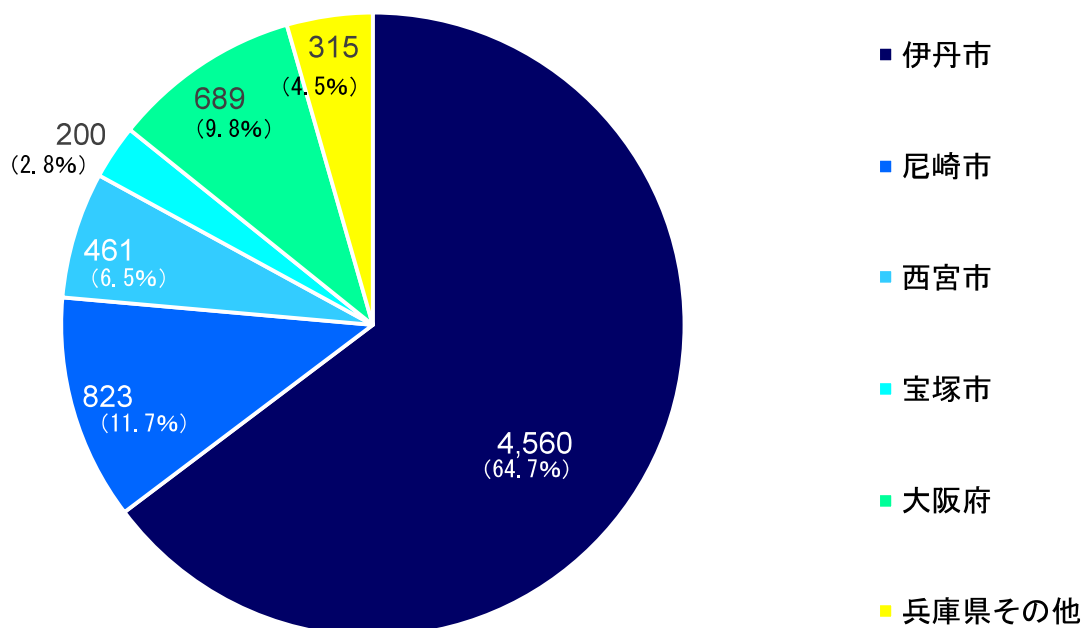


(2) 伊丹市国民健康保険レセプトデータによる分析（外来）

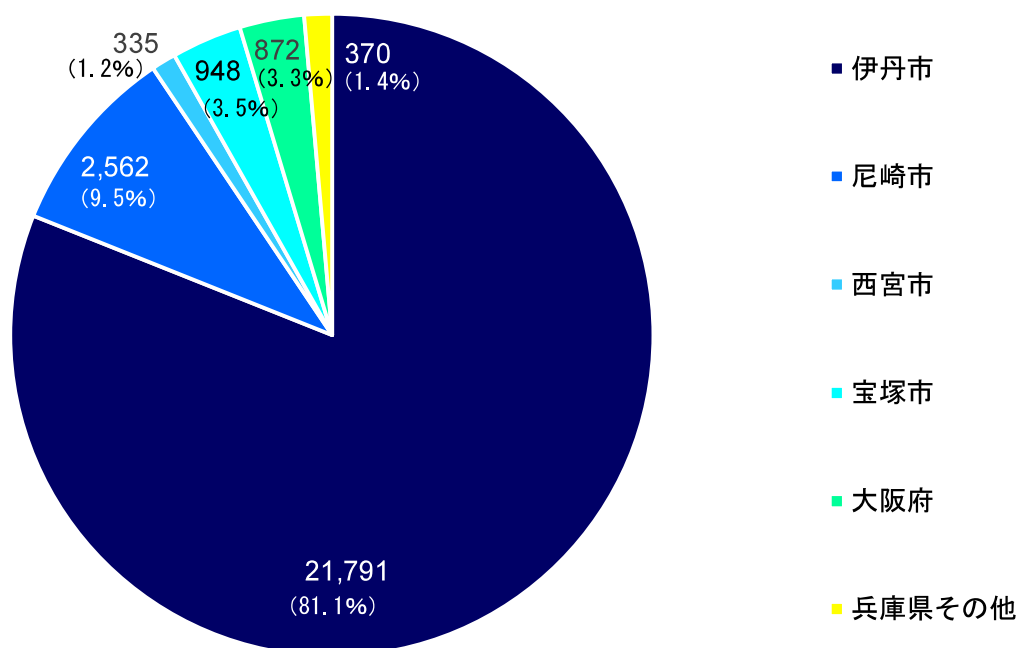
① 国保患者の外来受療（1月あたり実患者数）

伊丹市の外来における国保患者は、病院では64.7%、診療所では81.1%が伊丹市内で受療している。

<病院への外来受療>

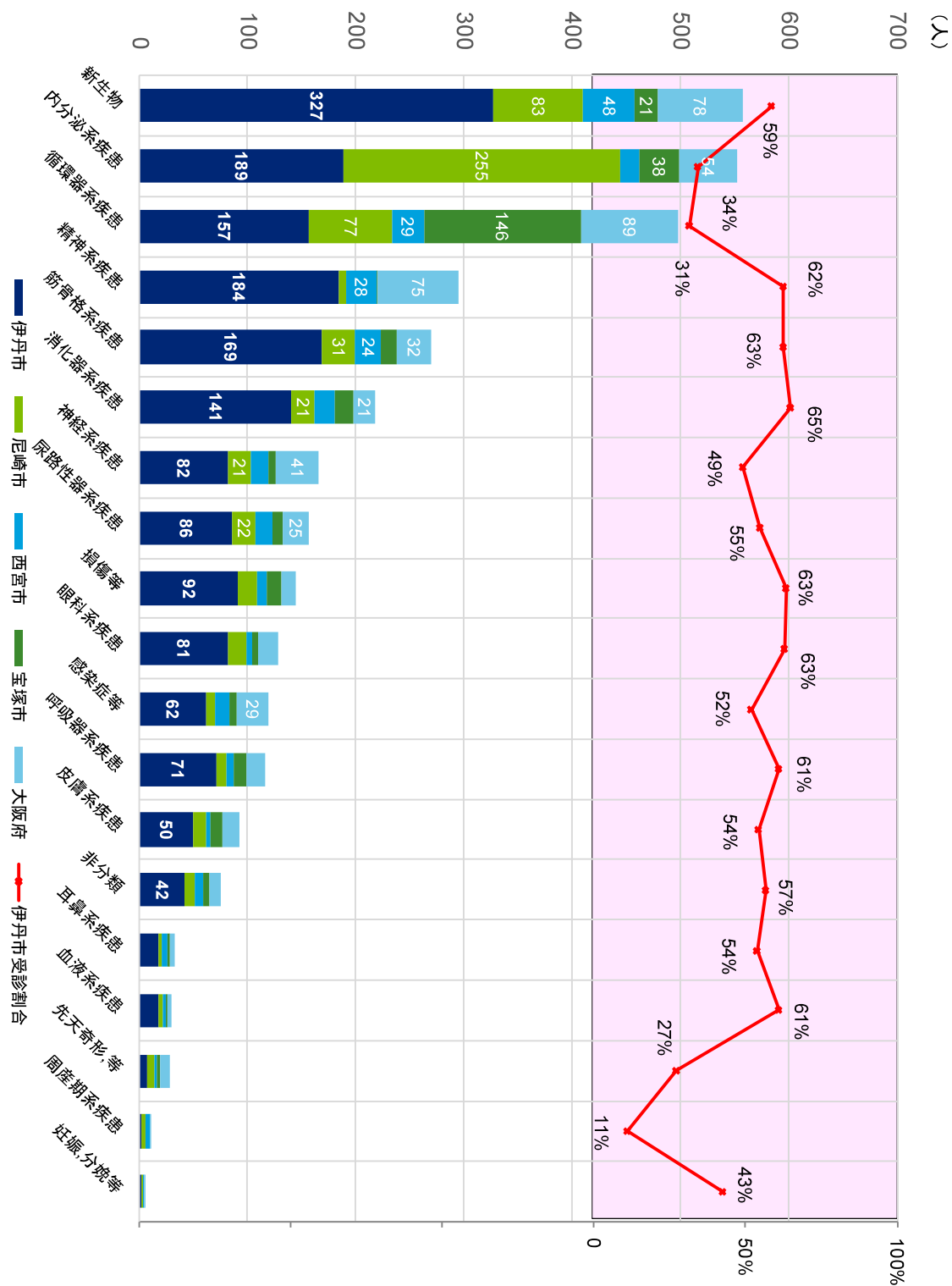


<診療所への外来受療>



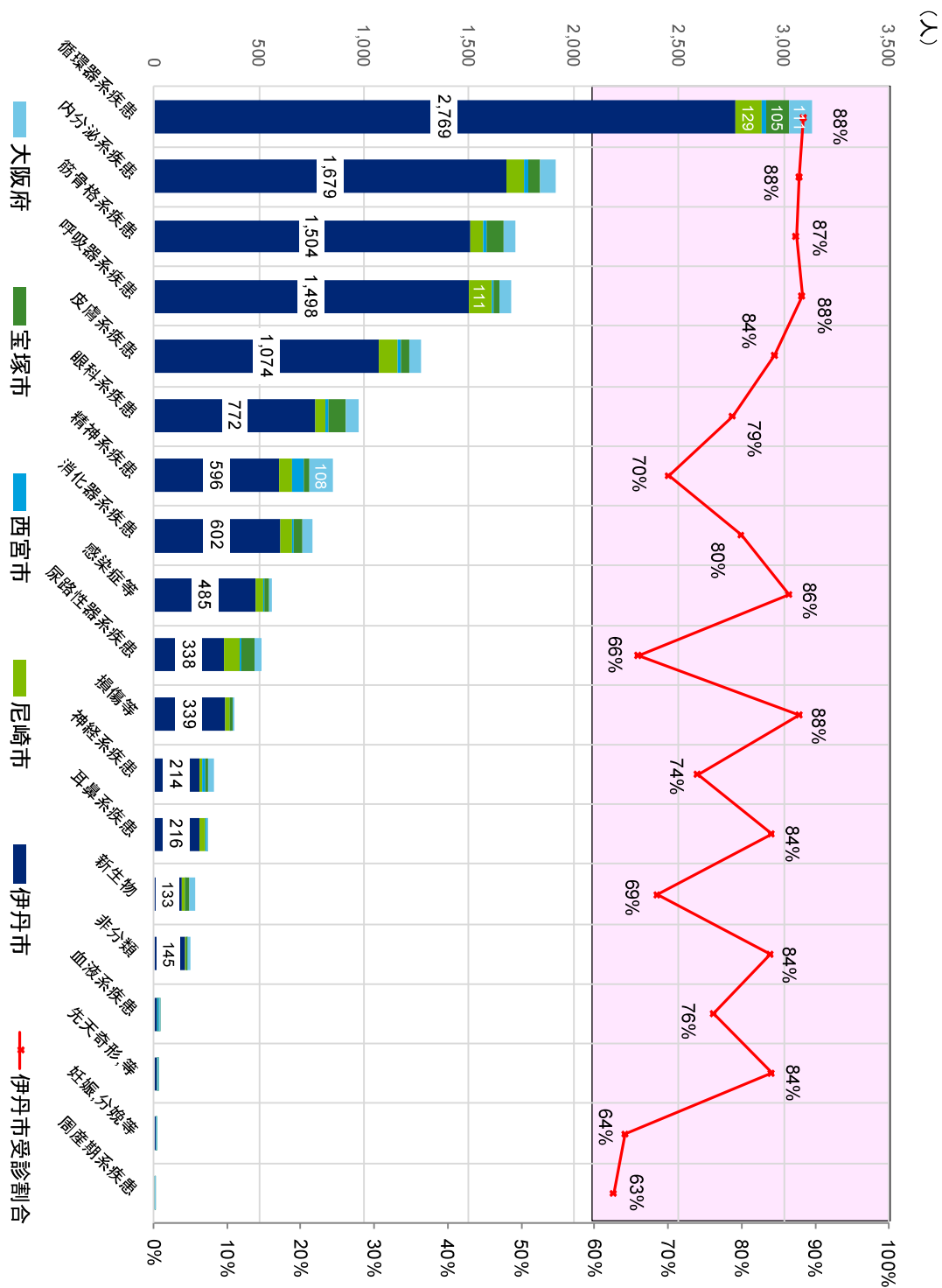
② 疾病別受診市【病院】（１月あたり実患者数及び伊丹市受診割合）

伊丹市外へ流出している病院への患者は、新生物、内分泌系、循環器系が多い。



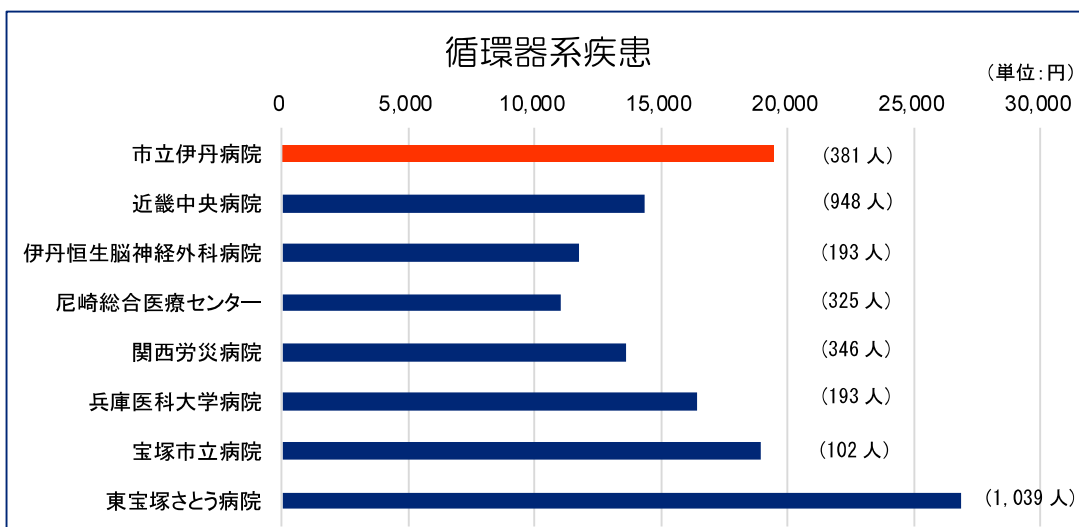
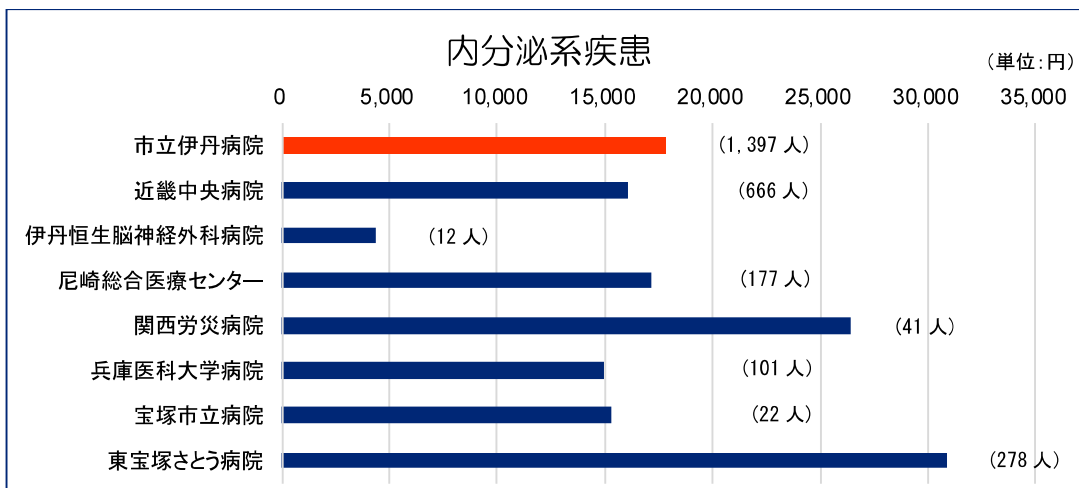
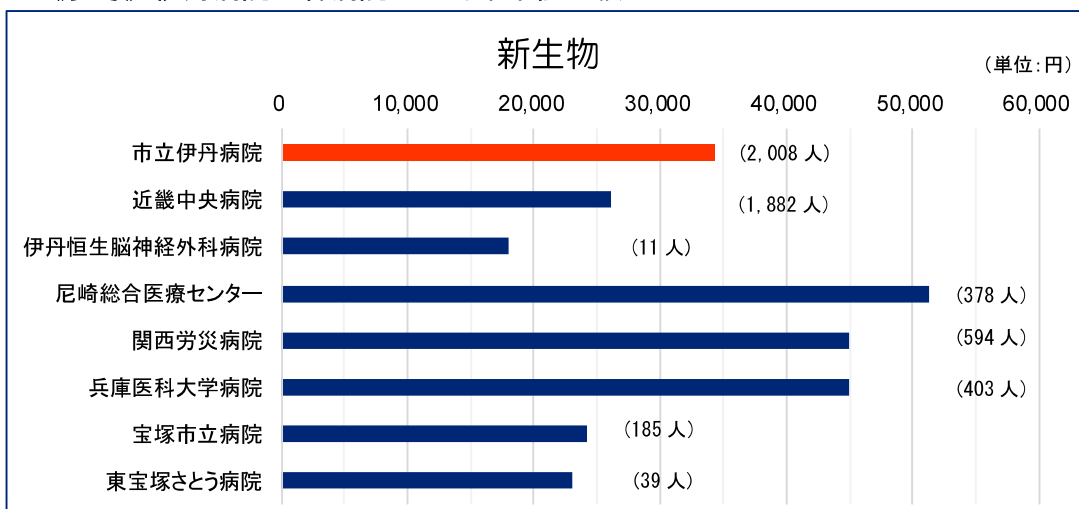
③ 疾病別受診市【診療所】（１月あたり実患者数及び伊丹市受診割合）

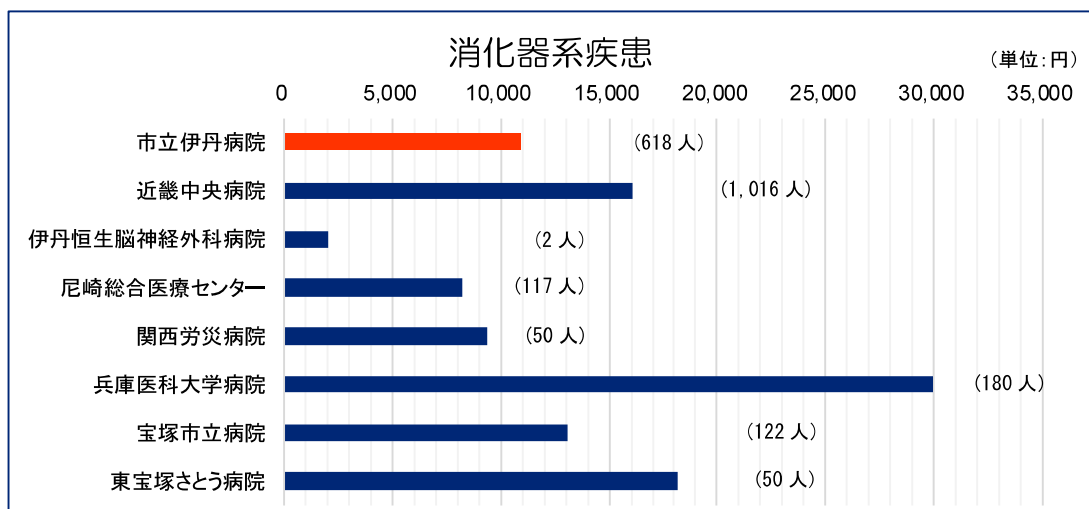
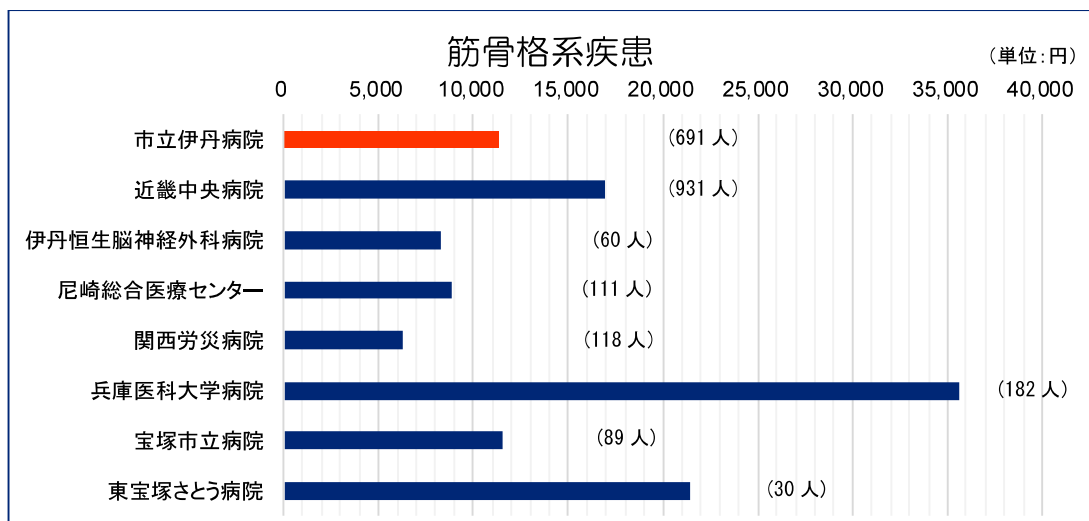
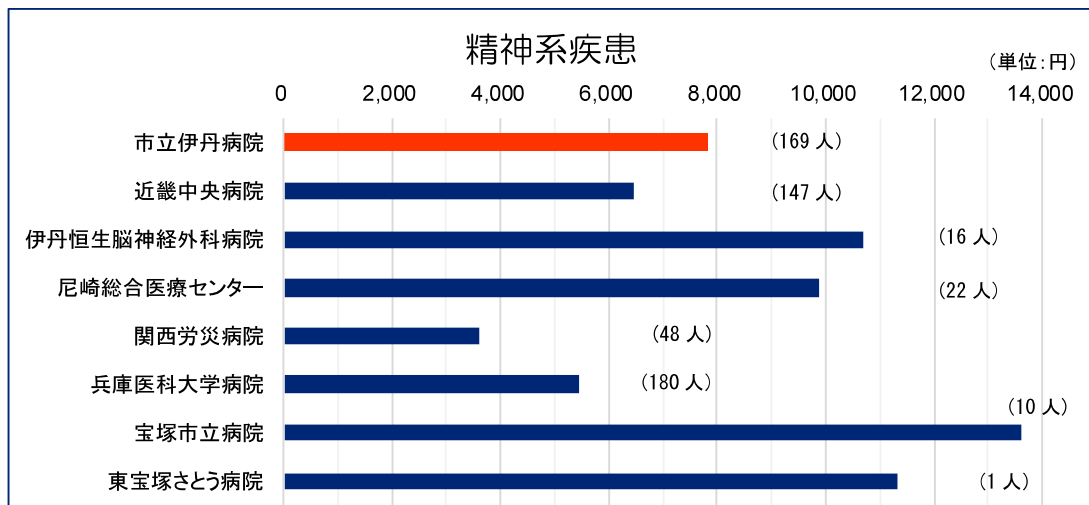
おおむね伊丹市内で受診しているが、伊丹市外へ流出している診療所への患者は循環器系などでやや多くなっている。

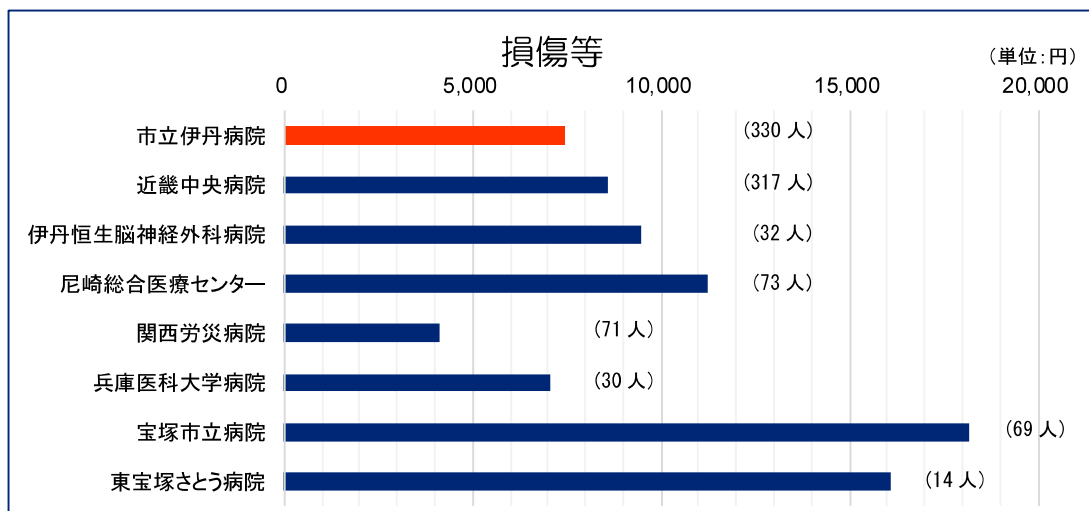
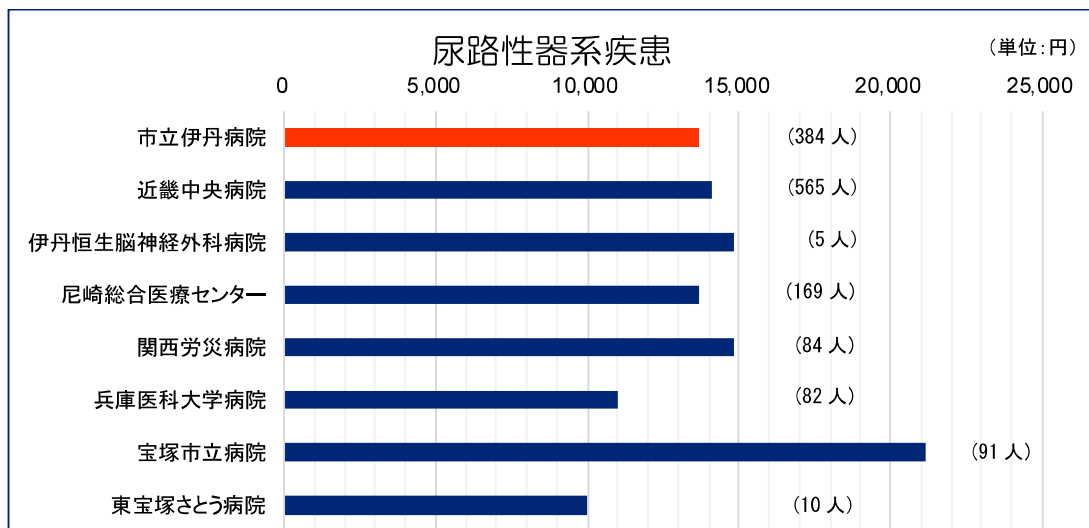
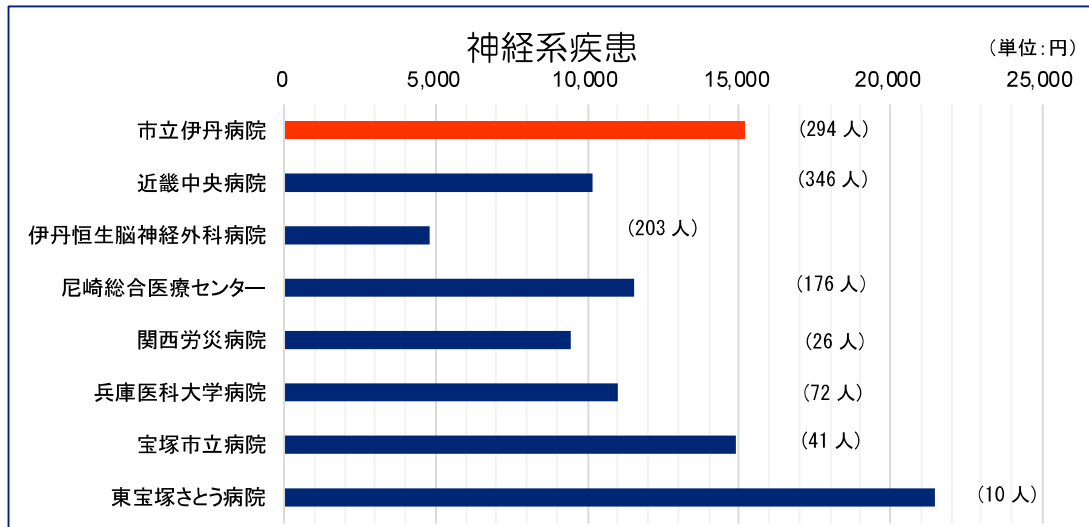


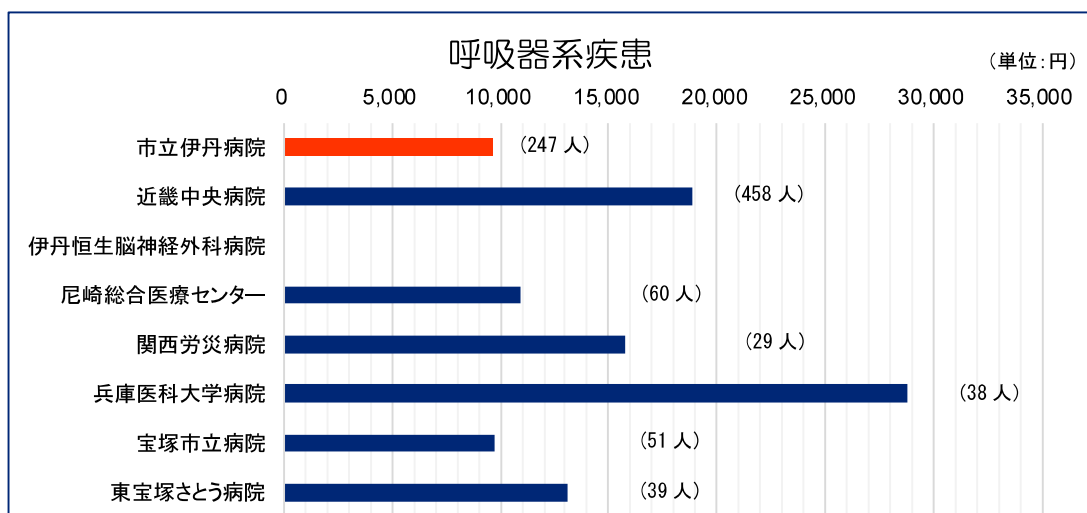
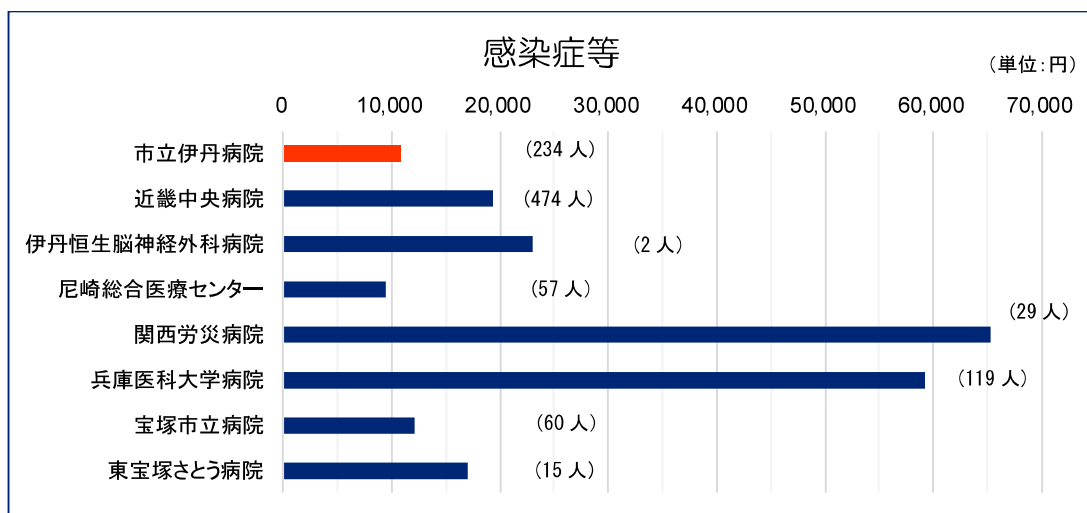
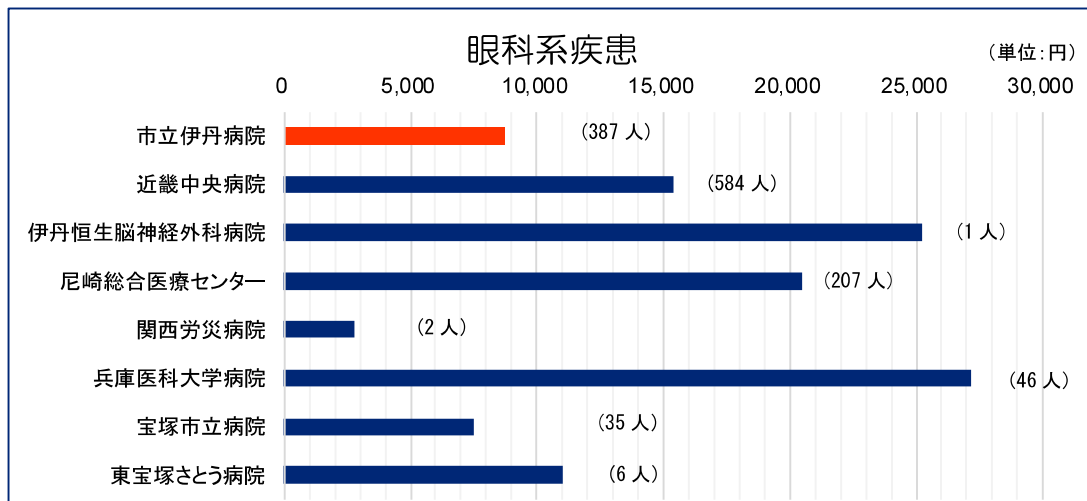
<《参考》伊丹病院と各病院との外来単価比較>

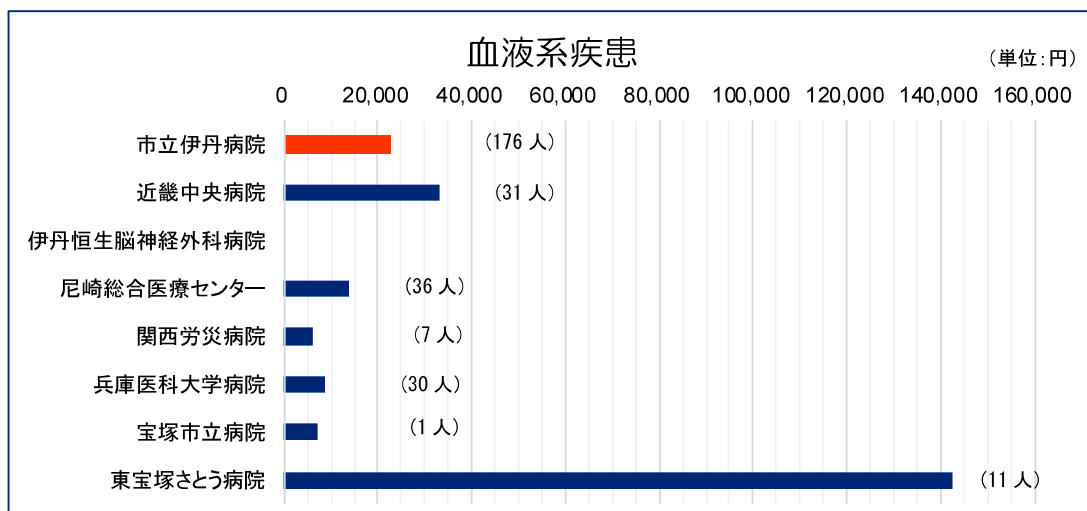
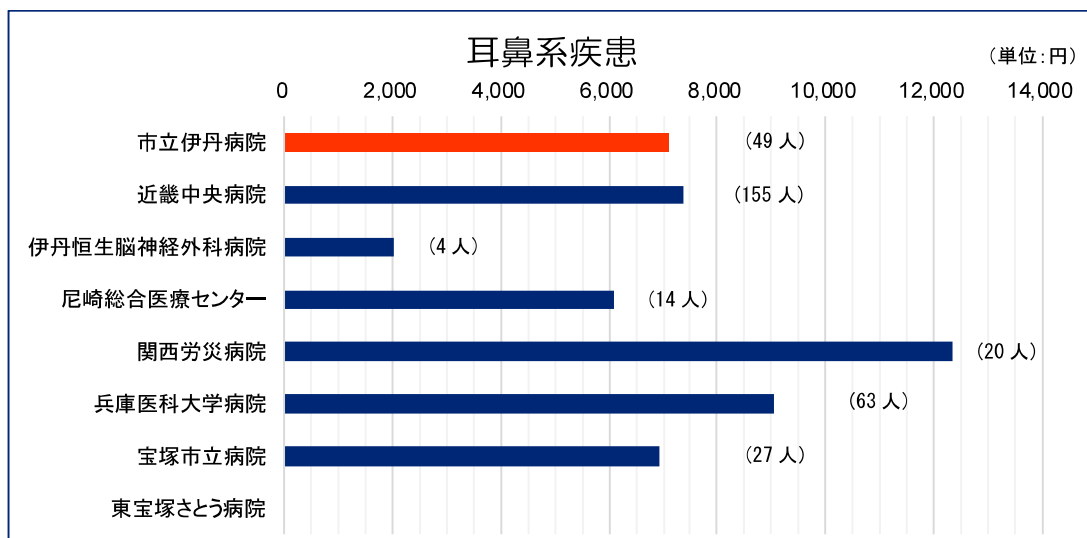
()は、12 か月分の実患者数

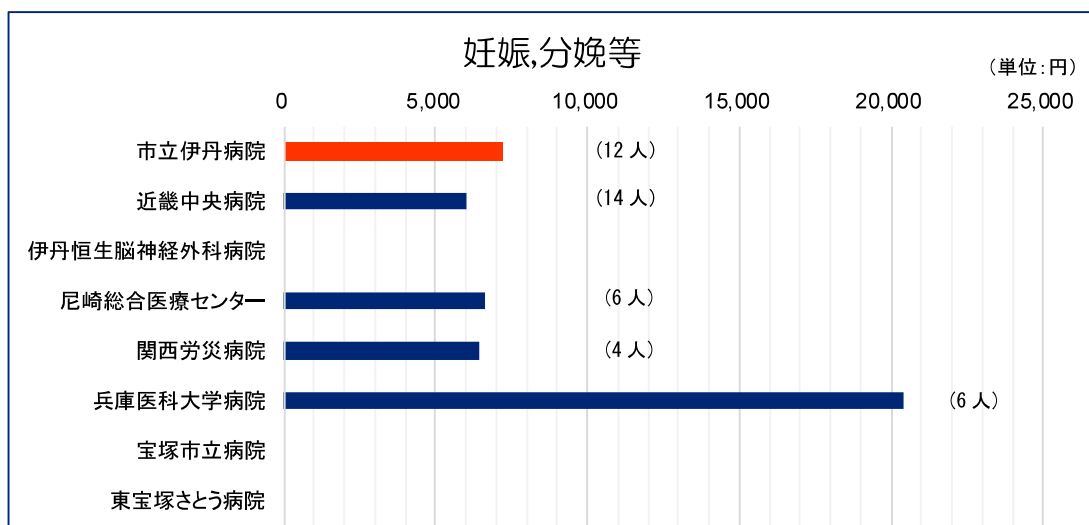
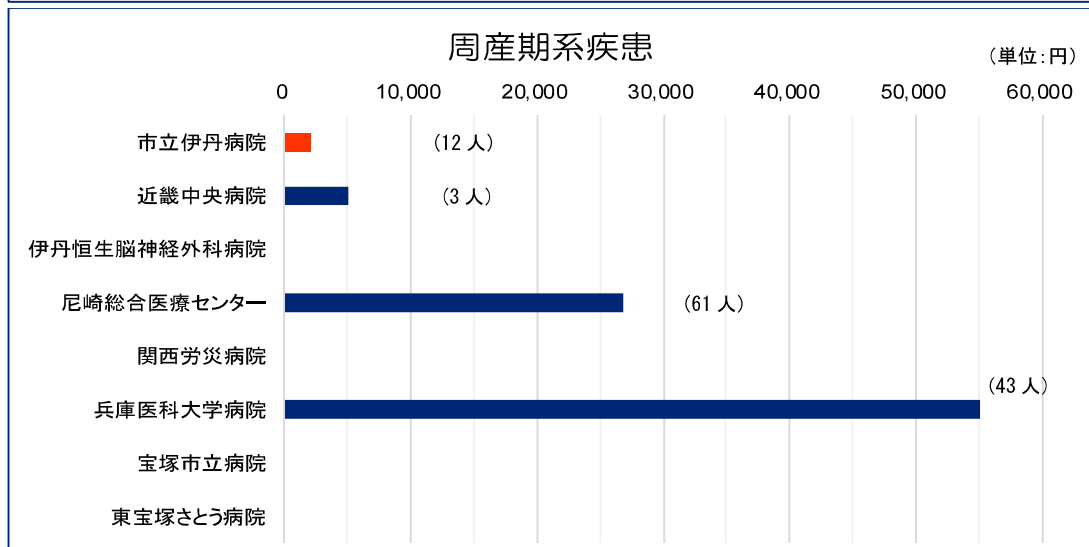
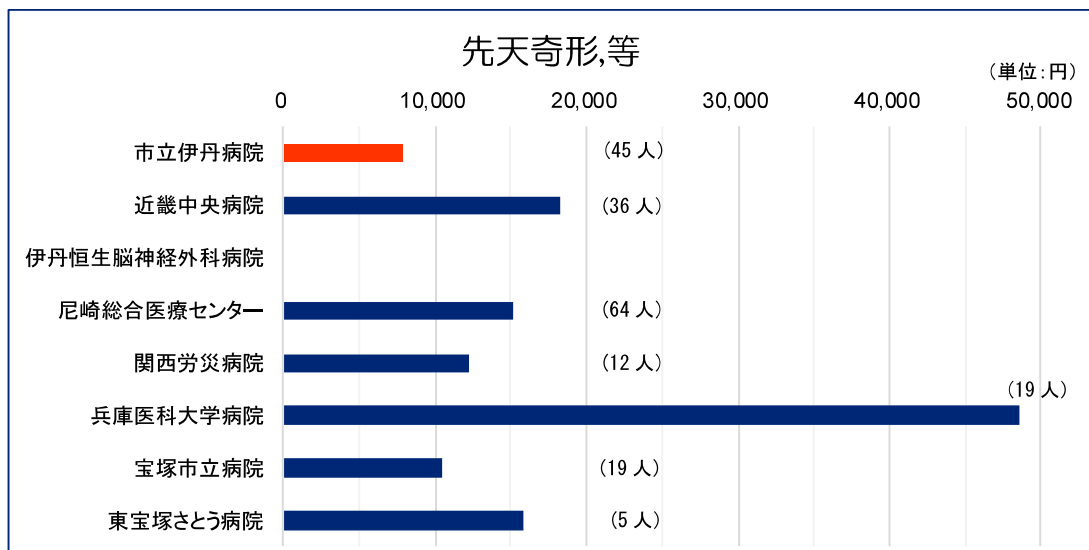












3. 市立伊丹病院の現状と課題

(1) 市立伊丹病院の歴史と役割

病院開設の機運の高まった昭和 30 年当時の本市の人口は 68,982 人で、年毎に急増期を迎える緒にあった時期であり、昭和 32 年 9 月 3 日、市のほぼ中央部に位置する春日丘 2 丁目 167 番地先、19,765 m²の敷地に外来診療棟、管理棟及び南病棟 100 床を設け、内科、外科、小児科、産婦人科、耳鼻咽喉科、理学療法科の 6 科をもって開院した。以来、数次の増改築を重ね 10 科、313 床の総合病院として四半世紀を経過したが、地域の中核的医療機関として今日的医療ニーズに応えるため診療科を増設、最新鋭医療機器の導入を図るべく昭和 54 年 4 月、移転移築へのプロジェクトチームが発足した。

昭和 58 年 5 月、市民の熱い期待と関係者の深い理解と協力によって、南に国道 171 号線、東には昆陽池公園と交通利便と自然環境に恵まれた昆陽池 1 丁目 100 番地先、24,348 m²の敷地に鉄骨鉄筋 C R 造、地下 1 階、地上 6 階、塔屋 2 階建て、延床面積 22,159 m²、病床数 405 床、15 診療科をもって開院した。その後、検診棟や外来棟の増築が行われるなか、最新鋭医療機器を導入していくとともに、平成 5 年 7 月からは全国に先駆けオーダーリングシステムを導入し、医療の充実と事務の効率化を図った。平成 7 年 1 月 17 日の阪神淡路大震災では、建物、設備の損傷により病院機能が麻痺したが、病院職員が一丸となり、いち早く機能回復が図られた。

また、閉鎖された阪神中央伝染病院病棟を人間ドック棟に改造し、市民の健康管理に寄与するとともに、診療科についても循環器科、呼吸器科などを標榜し、現在、病床数 414 床で伊丹市の中核病院として市民の生命と健康を守っている。

(2) 市立伊丹病院の経営状況の推移

平成 16 年度から始まった新医師臨床研修制度により医師不足などが顕在化し、各地の公立病院で診療科の縮小や閉鎖と救急医療からの撤退などが生じたことにより、多くの病院で経営難に直面することとなった。

伊丹病院においても、平成 17 年度、18 年度において医師が減少し、診療機能の縮小や夜間救急患者の受入抑制などによる収益の縮減により、多額の赤字決算が続くこととなった。

このような中、平成 19 年度に総務省より公立病院改革ガイドライン（以下、「旧ガイドライン」という。）が示され、病院事業を設置する地方公共団体は公立病院改革プランを策定することとなった。

伊丹病院では、旧ガイドラインが示される以前より、経営健全化計画を策定し、経営健全化への様々な取り組みを先行して実施していたため、従前の経営

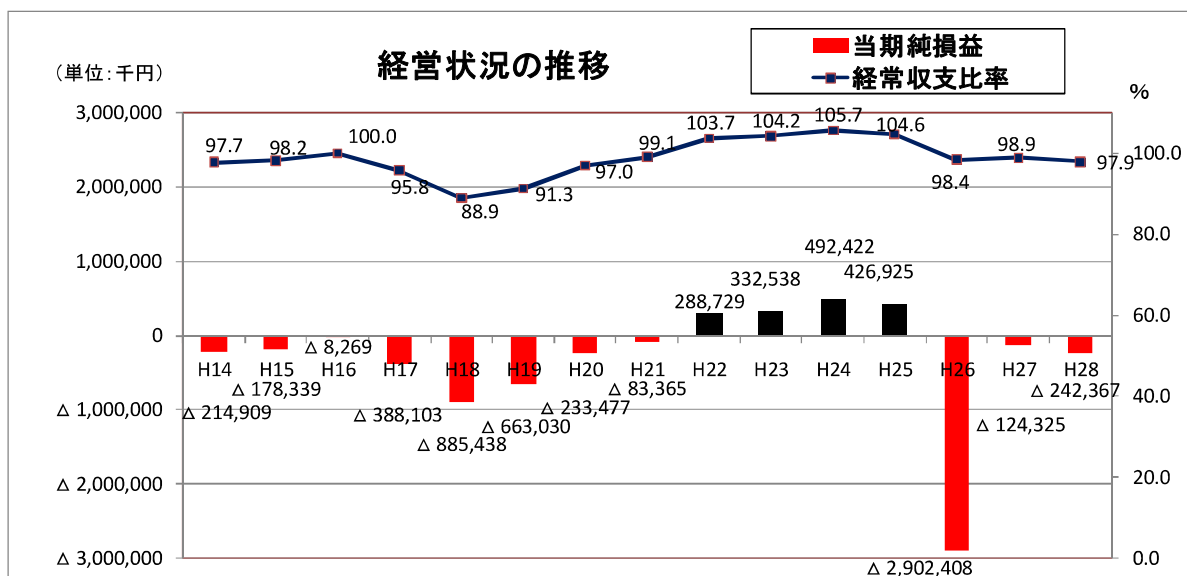
健全化計画に、旧ガイドラインにおいて求められた項目を追加する形で「市立伊丹病院改革プラン」を策定した。

平成 19 年度より多くのアクションプランを実施したことにより、平成 20 年度から収益が増加し、経営は改善傾向となったため、平成 22 年度から平成 25 年度までは、経常収支の黒字化を達成することができた。

しかし、平成 26 年度と平成 28 年度の診療報酬改定の影響などにより、平成 26 年度から平成 28 年度の 3 年間は赤字経営が続いている状況にある。

なお、経営健全化にかかる計画については、平成 23 年度で公立病院改革プランが終了したことから、平成 24 年度からは、「市立伊丹病院中期事業計画」を策定することにより経営健全化に取り組んできた。

また、平成 28 年度には、新ガイドラインに基づく、平成 29 年度から平成 32 年度までを計画期間とする、新たな市立伊丹病院改革プランを策定し、経常収支の黒字化を目指すとともに、阪神北圏域における中核的な急性期病院を目指して病院運営を行っている。



※平成 26 年度は、地方公営企業会計制度が改正されたことにより、2,736,715 千円の特別損失を計上している。

(3) 市立伊丹病院の医療提供体制

伊丹病院における医療提供体制の状況については、整形外科をはじめとする外科系診療科と内科系診療科は充実してきている状況にある。特に外科系診療科や内科系診療科に加え、看護師をはじめとするコメディカルの連携がとれており、チーム医療が充実している。しかし、手術件数や検査件数が増加しているため、麻酔科などの診療科の充実が必要となっている。

また、2次救急医療の機能強化を進めてきたが、循環器系診療科や救急医師などの人的体制が弱いため、救急医療提供体制という側面だけでなく、経営的観点からも強化が喫緊の課題となっている。

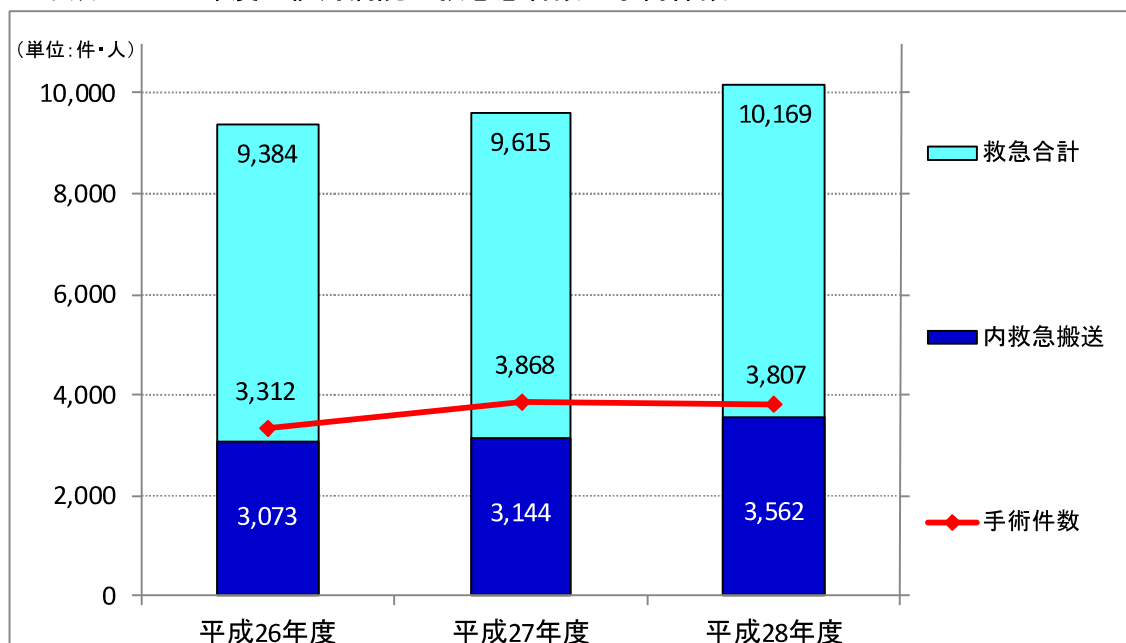
このような中、平成29年度には、不整脈に対するアブレーション治療の経験を多く持つ循環器内科医師を確保できたことにより、循環器内科の体制を強化していくことができる可能性が生じてきた。アブレーションのような高度な手技を身につけたい医師は多くいると考えられるため、症例を増やすことで医師確保につなげていくことができる。また、3テスラのMRIを導入することにより、神経内科の医師を確保することができれば、脳神経外科医の確保につながっていくため、引き続き関係大学への働きかけを進めていく。

伊丹病院の機能強化は、収益の強化にもつながるため、さらなる診療体制の強化を進めていく必要がある。

<伊丹病院の標榜診療科目> (平成29年4月1日現在)

内科、消化器内科、呼吸器内科、血液内科、糖尿病内科、循環器内科、老年内科、アレルギー疾患リウマチ科、心療内科、精神科、小児科、小児外科、外科、呼吸器外科、乳腺外科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、産婦人科、皮膚科、形成外科、眼科、耳鼻いんこう科、放射線治療科、放射線診断科、麻酔科、歯科口腔外科、病理診断科

<平成26～28年度 伊丹病院の救急患者数・手術件数>



<平成 27～29 年度 伊丹病院の医師数の推移（正規＋専攻医）>

（単位：人）

		H27.4.1					H28.4.1					H29.4.1				
		正規	研修医 専攻医	非常勤	外来 応援	計	正規	研修医 専攻医	非常勤	外来 応援	計	正規	研修医 専攻医	非常勤	外来 応援	計
内科	消化器	8		0.8	0.5	9.3	8	2	0.8	0.5	11.3	8	4	0.8	0.5	13.3
	呼吸器	5	4			9.0	7	6			13.0	11	3			14.0
	循環器	3			0.6	3.6	4			0.6	4.6	4	1		0.6	5.6
	血液	5				5.0	5				5.0	5				5.0
	糖尿病他	3			0.1	3.1	4		0.6	0.1	4.7	4		0.8		4.8
	老年	2			0.1	2.1	2	1			3.0	2	1			3.0
	アレルギー疾患 リウマチ科	1	2		0.2	3.2	2	2		0.2	4.2	2	2			4.0
	（人間ドック）				0.7	0.7				0.7	0.7				0.7	0.7
	（神経内科）				0.3	0.3				0.3	0.3				0.3	0.3
	小 計	27	6	0.8	2.5	36.3	32	11	1.4	2.4	46.8	36	11	1.6	2.1	50.7
精神科/心療内科					0.4	0.4				0.4	0.4				0.3	0.3
小児科		6	1	1.0	0.5	8.5	6		1.8	0.1	7.9	5	1	1.8	0.1	7.9
外科		7	3			10.0	7	4			11.0	7	2			9.0
呼吸器外科		2				2.0	2				2.0	2				2.0
乳腺外科		1			0.3	1.3				0.3	0.3	1			0.1	1.1
整形外科		8	2			10.0	9	3			12.0	8	3			11.0
脳神経外科		1				1.0	1				1.0	1				1.0
小児外科		0			0.1	0.1	0			0.1	0.1	0			0.1	0.1
皮膚科		2			0.4	2.4	1			0.3	1.3	1			0.2	1.2
形成外科		1				1.0	2				2.0	2				2.0
泌尿器科		4				4.0	4	1		0.2	5.2	3	1		0.1	4.1
産婦人科		5			0.6	5.6	6		0.4	0.2	6.6	7		0.7		7.7
眼科		2		1.0	0.4	3.4	2		1.0	0.3	3.3	2		1.0	0.4	3.4
耳鼻咽喉科					0.5	0.5				0.5	0.5				0.5	0.5
放射線科		4	1		0.3	5.3	4	1		0.3	5.3	5	1		0.3	6.3
歯科口腔外科		3				3.0	3				3.0	3				3.0
麻酔科		6			1.1	7.1	5		0.8	0.6	6.4	4		0.8	0.8	5.6
病理診断科		1		0.8	0.2	2.0	1		0.8	0.2	2.0	1		0.8	0.2	2.0
事業管理者		1	—	—		1.0	1	—	—		1.0	1	—	—		1.0
小計		81	13	3.6	7.3	104.9	86	20	6.2	5.9	118.1	89	19	6.7	5.2	119.9
臨床研修医		—	13	—	—	13.0	—	14	—	—	14.0	—	17	—	—	17.0
合計		81	26	3.6	7.3	117.9	86	34	6.2	5.9	132.1	89	36	6.7	5.2	136.9